

※インターネット「はらまち九条の会」で、「九条はらまち」の全号を見ることができます。



オダネルを覚醒させた「炎に焼かれるキリスト像」

九条はらまち

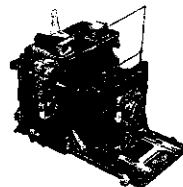
「はらまち九条の会」ニュース No. 7 2
2008(平成20)年8月9日(土)発行

＜1945(昭和20)年8月9日午前11時2分、長崎に史上2度目の原爆投下の日＞

8月6日の広島につづき、9日、2発目の原爆投下目標の第一は小倉、第二が長崎だった。しかし、小倉は厚い雲におおわれていて投下をあきらめ、B 29 が沖縄に戻る途中、第二目標の長崎上空に立ち寄る。やはり厚い雲におおわれていたが一カ所だけ雲の切れ目を見つけ、プルトニウム爆弾を投下。

今、話題のジョー・オダネル写真集『トランクの中の日本』

長崎原爆投下から63周年を前に8月7日、NHK-TV スペシャル「解かれた封印～米軍カメラマンが見た NAGASAKI～」が放映されました。折しも全国や県内各地で写真展などが開催されていて、ジョー・オダネル写真集『トランクの中の日本』が、今大きな話題を集めています。



オダネル氏愛用のカメラ▲



ジョー・オダネル
Joe O'Donnell

- 1922年5月 米国ペンシルバニア州に生まれる
- 1941年12月 米国海兵隊に志願する
- 1942年2月より従軍カメラマンとして大学で現像の技術を学び、航空写真撮影の訓練を受ける
- 1945年9月 占領軍のカメラマンとして日本に上陸 広島・長崎などの都市被災状況記録の写真を撮影
- 1946年3月 帰国し除隊。私用力カメラで撮影した悲惨な写真を自宅へ持ち帰り、トランクにしまう
- 1949年7月より1968年8月まで、合衆国情報局に籍をおき、ホワイトハウス付きカメラマンとして、歴代大統領の歴史的な写真を撮影する。徐々に被爆の影響が出始め、ガンなどに苦しむ
- 1989年 屋根裏にしまい込んだトランクを開ける
- 1990年 原爆写真展をテネシー州で開く
- 1995年夏 スミソニアン博物館で企画されていた写真展は在郷軍人やマスコミによりの中止となるが、以後世界で講演活動と写真展を開催
- 2007年8月9日 奇しくも長崎原爆投下の日、86歳の生涯を閉じる。長男が遺志を継ぐ
- オダネル氏の妻坂井貴美子さん<左写真>は会津若松市出身。98年に結婚。オダネルの遺志を継ぎ、アメリカや日本各地で「オダネル原爆写真展」を開催するなど平和を訴える活動をされています。今月17日、会津若松市でも講演をされました。

▶「焼き場に立つ少年」一九四五年九月、アメリカ陸軍カメラマンのジョー・オダネルが、被爆地の長崎で撮影。死んでしまった幼い弟を背負い、川岸に設けられた死体焼き場にやってくる。直立不動の姿勢で順番を待つ十歳ほどの少年。



「焼き場にて、長崎

この少年が死んでしまった弟をつれて焼き場にやってきたとき、私は初めて軍隊の影響がこんな幼い子供にまで及んでいることを知った。アメリカの少年はとてこんなことはできないだろう。直立不動の姿勢で、何の感情も見せず、涙も流さなかった。そばに行つてなぐさめてやりたいと思つたが、それもできなかった。もし私がそうすれば、彼の苦痛と悲しみを必死でこらえている力をくずしてしまうだろう。私はなす術もなく、立ちつくしていた。

私はなす術もなく...

▲写真と添え書きは、『トランクの中の日本』(小学館発行 ¥2,625)よりコピー

裏面に、若松丈太郎さんの詩『死んでしまつたおれに』と、その英訳詩

■詩人で本会会員の若松丈太郎さんは、この「焼き場に立つ少年」の写真に触発され、2001年、『死んでしまつたおれに』という詩を書きます。■詩は1年前の『九条はらまち』No.32(2007年8月6日発行)で紹介し反響をよびましたが、このほど結城文さん(英文学者・歌人・74歳)が英訳されました。●若松さんの<作品>と<英訳作品>を並記して裏面に掲載しました。文字が小さいですが、ご鑑賞ください。



8月7日放映のNHKテレビ「解かれた封印～米軍カメラマンが見たNAGASAKI～」(50分)はダビングしてあります。借用ご希望の方は、事務局・山崎(TEL22-8631)へお申し出ください。

若松丈太郎

Jotaro Wakamatsu (1935-) born in Iwate and lives in Fukushima.

TO ME ALREADY DEAD

for the sake of "At the Crematory, Nagasaki"

taken by Joe O'Donnell

It's me.
It's me in that picture—
the moment I saw that photo.
It's me,
in the fourth grade of the elementary school,
thus, I thought.

Fixing his eyes forward,
his lips closed tightly
his hair closely cropped—
fingers stretched straight
with middle fingers on the side seams of his shorts,
heels together
his toes apart.
It is the posture our body has learned well;
It is the posture of "Come to Attention!"
but the boy leans forward,
the upper part of his body bends forward a little
in an attitude of a "bow",
His brother is on his back of "bow."
When he bows his brother is on his back;
this boy has his brother on his back
firmly tied to him,
his brother's head had fallen back.
He is already dead on his brother's back.

Have you seen the eyes of the boy who has a brother on his back?
Have you seen the eyes of the boy who bears his sorrow?
Bearing his sorrow, his eyes are fixed in front.
enduring his sadness, what is he looking at?
To whom does he "bow"?

Death overflows on the ground,
life and death are mingled
life and death are back to back
separated with a sheet of cloth, elder brother and younger brother
are allotted to life and death,
even though their life and their death were replaced.
Death doesn't know his error.
Death overflows on the ground
folds, piles up;
the dead are wrapped by the flames of cremation;
flames shine on the cheeks of the boy.
To the numerous dead who might be fathers, mothers, brothers, friends
to the numerous dead who might be the boy himself,
this "bow" is a bidding of farewell.
It is a greeting from those who have scarcely escaped death.

The boy unfastened his tie
and put his brother down
then
enduring sorrow, memorizes
his brother burning in flames,
the dead who might have been himself.

"It's me.
It's ten-year-old me in this picture."
It's me, dead in the picture,
receiving greetings from those who scarcely escaped death.
Returning the greeting,
now when half a century has passed,
now when a new century has arrived
the earth's reality is that the boy's sorrow exists.



若松丈太郎 一九三五年岩手県生まれ。日本ペンクラブ会員、日本現代詩人協会、前福島県現代詩人協会会長。詩集『海のほうへ海のほうから』『いくつもの川があつて』『越境する霧』。南相馬市原町区にお住まいです。

死んでしまったおれに

若松丈太郎

ジョー・オダネル撮影「焼き場に立つ少年*」のために

おれだ
おれが写っている
と
写真を眼にした瞬間
国民学校初等科四年のおれだ
と



正面前方に視線を据えている
一文字に口を結んでいる
丸刈りの頭
指をびしっとそろえ
その中指は半ズボンの両脇の縫い目に添わせている
はだしの踵をそろえ
つま先びらきに立っている
おれたちがからだにたたき込まれた姿勢
〈気を付け〉の姿勢
にはちがいないが
少年は上体をやや前傾させている
腰をわずかに折って
これは〈礼〉の姿勢だ

〈礼〉の姿勢の背中に弟
少年は弟を背負っている
背負い帯でしっかりと背負っている
弟は首をのけぞらせている
弟は兄の背中ですでに息絶えている

死んだ弟を背負った少年のまなざしを見たか
かなしみに耐えている少年のまなざしを見たか
かなしみに耐えつつ視線は前方に据えられている
かなしみに耐えつつ視線はななに向けられているのか
ななに対しても〈礼〉なのか

地上に死があふれ
生と死とが入りまじり
生と死とが背中あわせて
兄と弟とが一枚の布をさかんに
生と死とに別れ
兄と弟の生と死とが入れかわっても
死神はみずからのまがいに気づくはずもなく

地上に死者があふれ
折り重ね積みあげられ
死者は茶毘のほのおに包まれる
ほのおが少年の頬をほてらす
父や母であり兄弟であり友人であるかもしれない
おびたしい死者たちへの
少年自身であるかもしれないおびたしい死者たちへの
〈礼〉は別れの挨拶である
かろうじて死をまぬがれた者からの挨拶である

少年は背負い帯をほどき
弟を背中からおろし
やがて
ほのおをあけて燃える弟を
少年自身であるかもしれない死者を
かなしみに耐えつつ記憶する

おれだ
十歳のおれが写っている
と
写真のなかの死者であるおれに対し
かろうじて生き残った者からの挨拶を返す
挨拶を返しつつ
半世紀を経たいまも
世紀を新しくするいまも
あの少年のかなしみが存在する地上の現実を

* the collections of photos "Japan in a Trunk" (June, 1995 Shogakukan)